

陰徳とアロハ・スピリッツ

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文



愛知淑徳創設当時の清作先生

ハワイアンは千五百年程前に、遙か南のマルケサス諸島から、星や波や風をたよりの大航海をし、ハワイにたどり着き定住するようになった。

その時、持ち込んだものにタロイモがある。一つのタロイモは子イモ・孫イモと増えていきハワイアンの食生活を支えた。一つのタロイモは子イモ・孫イモと増えていきハワイアンの食生活を支えた。

「オハナ」というハワイ語がある。タロイモを表す「オハ」からきている。一つの種イモが次々に増えていき、ハワイアンを支えたように、今のハワイアンも、最初に定住した人達から連綿と続く「オハナ（家族）」なのである。

「オハナ」を大切にしているハワイアンは、かつて、最初に生まれた子は祖父母に養子に出した。男の子なら父親の親に、女の子なら母親の親に。これにより、祖先から伝わることを継承でき、祖先とのつながりを大切にできるからである。

こうした伝統から、ハワイアンは、実の子を養子に出したり、他人の子どもを養子に受け入れるのを厭わない。生活に困っていたり、何か事情があれば「アロハ

（愛・スピリッツ（心）」で、その子どもを自分の子として育てる。「オハナ」の価値観から「アロハスピリッツ」を発揮するのである。

困っている人の子を、何の見返りも求めず自分の子として育てるハワイアンの行動は「陰徳」といえよう。

☆

愛知淑徳学園の伝統精神「淑徳魂」は困難に際してくじけない「強さ」と人が見ていようとまいと奉仕できる「やさしさ」から成り立っている。後者の「やさしさ」は「陰徳」である。

創立者小林清作先生は、校長でありながらさりげなく校内の「ゴミ」を拾っていた。その姿は生徒の目にもふれることもあり、「師の君の廊下に落ちし紙屑を拾はるゝ姿今も目に見ゆ」（礼子）と歌われている。

清作先生が紙屑を拾うのは、先生の辞世の句に「我れ死なじいかで死せんや

淑徳の為すべき仕事多く残して」と歌われたような、愛知淑徳へのあふれる情熱・愛の心から、自然に、さりげなくとられた行動であったであろう。

☆

愛の心から、自然に、さりげなく、何の見返りを求めることなくできる奉仕は、いつの時代も、世界のどこでも尊く、大切にしていきたいものである。

二十一年三月十日が遠ざかっていくにつれ、なおさらである。



ハワイのカウアイ島ハナレイ溪谷のタロイモ畑とハワイ州の鳥のネネ（筆者撮影）